

叔父に與へるかを精細に觀察して、叔父の様子から暗殺したかどうかを確かめようか決心した。そこで此の爲に芝居の準備をさせ、その實演の時には王と王妃とを一所に招待した。

芝居の筋は維納にあつた侯爵の暗殺である。侯爵はゴンザゴと言ひ妻はバプチスタと言つた。所が侯爵の近親であるルシアヌスと言ふ男が領地を取るために侯爵を花園の中で毒殺し、そしてその殺人者がそのすぐあいでゴンザゴの妻の愛を得る言ふ仕組であつた。

此の芝居が演ぜられる時、王は自分のために畏が掛けられてゐることも知らずに、王妃や廷臣共をつれて見に来た。ハムレットは注意深く王の側に座つてその顔色をうかがつてゐた。芝居はゴンザゴとその妻との對話で始まつた。そして妻は色々自分の愛を誓ひ、若し夫のゴンザゴより生き延びる様な事があつても、決して二度結婚する様な事はないと言つた。若し二度目の夫に嫁す様な事があれば呪はれても關はぬと言つた。先夫を殺す様な邪しまな女でなければそんな事をする女はないだらうと附け加へた。ハムレットは此の時叔父が色を變へたのを見た。そして王も王妃も同様に苦逢を囓むやうに嫌な様子であるのを見た。然し段々と筋が進んで、ルシアヌスが花園の中に眠つてゐるゴンザゴを毒殺する所になるに、王は、自分が前の王である兄を花園の中で毒殺した犯行と非常によく似てゐたので、良心の呵責に耐へ兼ねて、ちつと座つてその残りを見てゐる事が出来

ず、不意に燈火を寢室につけよと命じながら、急病の様に裝ひ、或は少し位は苦しかつたのであらう、急にその芝居から出て行つた。王が去つたので芝居は中止された。さてハムレットは亡靈の言葉が本當であり妄想でなかつた事を充分に確める事が出来た。それで何か大きな疑惑とか不安とかが不意に解決された時のやうに、非常に喜んでホレーシオに亡靈の言つた言葉を百萬圓にも買はうと誓つた。然しハムレットがいよいよ叔父が自分の父主を殺したのに違いない事が解つたからこんな方法で復讐しようか決心を定め兼ねてゐた時に、母の王妃から内々話し度い事があるから母の居間へ来る様にこの使が来た。

王妃がハムレットを呼びにやつたのは王の希望から出た事で、王妃に王子に對して彼の最近の振舞が二人を如何に不快に思はせたかを知らせようと考へたのであつた。そして王はその會談の始終を盡く知り度く思ひ、母の話があまり偏頗になつて、自分が特に知り度いと思ふハムレットの言葉の幾部分を抜かす様な事があるかも知れないと考へたので、老侍従長ボロニアスに命じて王妃の居間の垂帳の後に立つてゐて、見られないで話をすつかり聞く様に命じた。此の計略は邪惡な格言や、國家の政略等のみの中に年老いたボロニアスの性質には持つて來いであつた。そして間接に狡猾な方法で事件の祕密を知ると言ふ事を好んでゐた。

ハムレットが母の所へ行くと、母は遠廻しに王子の行爲や振舞を責め、父に對して非常な不禮を働いたと言つた。王妃は叔父である王を自分と結婚したために、ハムレットの父と呼んだのである。ハムレットは母が、父と言ふ様な親しい又尊い名前を、現に自分の父を殺した大罪人に與へた事を非常に憤慨してやゝ鋭く答へた。

「お母さん、あなたこそ私のお父さんに對して非常な罪を犯したのです。」

王妃は譯もない事を答へる言ふとハムレットは、

「道に外れた尋ねやうをなさるんですもの。」

王妃は今話してゐる私を誰であるかを忘れたのか戒めた。

「私は忘れなくては仕方ないのです！あゝ、あなたは王妃ですあなたの夫の弟の妻です、そして私のお母さんです、私は現在の貴方の身分でない事を望みます。」

「いや、お前が私をそんなに馬鹿にするのなら、問答の出来る者と呼んで糺させよう。」

王妃は答へ王がボローニヤス呼びにやらうとした。然しハムレットは王妃を行かせなかつた今は母と唯二人であるのだから、尙自分の言葉が母の邪しな生活に對する自覺を起させる事が出来ぬものか試みるため、手頭をつかまへて逃がさぬ様にして椅子に座らせた。王妃は王子の熱

心な様子に愕ろき、狂になつてゐるのだから自分に害を加へられては大變だと心配して叫んだ。その時垂帳の蔭に「誰か、誰か、王妃が！」と叫ぶ聲を聞いた。ハムレットはこれを聞いて、確かに王自身がその中に隠れてゐるんだと思つて、劔を抜き、聲のしたあたりを目掛けて刺し通した。丁度そこを走つてゐる鼠をでも刺し殺す様に、聲がやんだので死んだのだと思つた。然しその死體を引出して見た時、それは王ではなくて、垂帳の後に密偵になつて立つてゐた。老侍従長のボローニヤスであつた。

「おゝまあ何と言ふ手荒いむごたらしい事をしたのです。」

王妃は叫んだ。

「むごたらしい事ですつて、お母さん、併しあなたが王を殺し、其弟を再婚しられたのさ比べれば、そう悪くもありませんまい。」

ハムレットは斯う言ひ出した以上こゝで止める譯にも行かなかつた。もう母親に明らかに言つてしまはうと言ふ氣になつて、續けて言つた。子供は兩親の過失なきを餘りやかましく言ひ立てる可きではないが、それが大罪である場合には、息子でも母親に對して少し位は荒々しい言葉を言つてもゆるされるでせう。然もその言葉が母の爲を思つて、邪しな道から引き戻さうとして言ふので

あつて、叱責するために言ふのでない限りは。そこで此の高徳の王子は熱調を帯びて王妃の罪の憎む可き事を説き諭した。自分の父である先王を忘れ果て、こんなに早く暗殺者アサシナヒと噂されてゐた王弟オウジ結婚した事や、先夫に誓つて置きながらそんな行をすれば、女のあらゆる誓ひは疑はれ、あらゆる徳は偽善と見え、結婚の契りちぎりなども賭博者の誓言ちかぜと變らなくなり、宗教の儀式も眞似事で、ほんの形式の言葉に過ぎなくなる言ひ、そして王妃のした行ひのために、天はそれを見て恥ぢ、地はそのために病氣になつてゐる程であるまで切言した。それから王子は王妃に二つの肖像を見せた。その一つは先王の肖像であり、他の一つは今王の肖像であつた。そしてその相違を御覽なさいと言つた。何と言ふ先王は氣高い額かぶでしょう。何と神々しい顔立ちではありませんか！アポロアポロの縮髮ぢくぱつ、ジュピターの額、軍神の眼まゝ、そして此の立姿は雲にそびゆる高峰に立つたマアキュリーマアキュリーそのまゝの風情、此の方こそ前にはあなたの夫であつたのですと言つて、次にその夫の代りに得た弟の肖像を示し、健全な兄を殺してしまつた故に、まるで毒虫か蠍トコジメの様に見えるではありませんかと言つた。斯う言はれて王妃も始めて自分の魂に眼を向けさゝれて、黒々くろくろと染込んだ心の穢れを心より恥ぢた。王子は尙も續けて、第一の夫を殺して、盜賊の様な奸計を以て王位を得た様な男と何うして一緒に暮らし、又妻になつてゐる事が出来るのですか。……等と言つてゐた時である。父の亡靈

が生きてゐた時と同じ姿で、そして最近に見た通りの姿で、その室に這入つて來た。ハムレットは非常に愕いて何事なのかと尋ねた。亡靈は約束をして置いた復讐をハムレットが忘れてしまつた様に思はれるので、その事を思ひ出させるために來たのだと言ひ、亡靈は母に告げよと命じ、さもなければ王妃は悲しみと怖れのために死ぬだらう。そして消ぬ去つたが、亡靈はハムレット以外には誰にも見えず、亡靈が立つてゐた所を指さしても、又その有様を語つても、母にはさうしても見えなかつた。母は此の間王子が空に向つて（さうとしか思はれなかつた）話しをしてゐるのを聞いて大層怖ろしがつた。そしてこれは王子の心が混亂してゐるからだおかしと非難した。然しハムレットは父の亡靈が再び地上に來ねばならぬ様な事にしたのは、自分の罪の爲だおかしも思はず、王子の狂氣のためだおかしと考へて、自分の邪しまな心に詔はないで下さいと願ひ、自分の手の脈はこの通り健全で少しも狂人の様な事はないと手を差出した。そして又涙を流して、過去の事を見て天に告白し、將來は王の伴侶となる事を避け、決して王の妻おかしならぬ様に懇願し、若し王妃が先王の面影をしのんで、自分おかしに對して母らしくして呉れるならば、自分はその時こそ子として従順に祝福を受けたいと言ひ、王妃は王子の言ふ通りに従はうと約束して二人の會談は終つた。

さてハムレットはほつとして、不幸にも自分があやまつて殺したのは誰かと考へた。そしてそれ

が自分が深く愛してゐるオフィリヤの父、ボローニヤスである事に気がついた時、少し屍體から立ちのいて、大分氣が沈まつたため、自分の仕た事をさめざめと泣いた。

此のボローニヤスの不幸な死が王にハムレットを外國へ遣はす口實を與へた。王は怖ろしく思つてゐるので王子を殺し度いと願つたが、ハムレットを愛してゐる國民の怨を買ふのを怖れ、又王妃もあんなに不倫でありながらも、王子を深く愛してゐたからさうする事もできなかつた。そこで此の陰險な王は、ボローニヤスを殺した詮議を避けて、ハムレットの安全を謀るといふ口實の下に、二人の廷臣をつけて英國へ行く船に乗せてしまつた。その二人に手紙を托して、その時分丁抹に服従して貢物を遣つてゐた英國の宮廷へ、佳い加減な理由の下にハムレットが英國へ上陸するや否や殺してしまつて呉れよと書き送つた。ハムレットは何か奸計があるのだらうと疑ひを起し、夜中に祕かに手紙を取り出し、上手に自分の名前を消して、その代りに自分を見張りしてゐる二人の役人が殺される様にその名前を書き入れて置いた。そして手紙を封じて、元の場所へ返して置いた。その後間も無く船は海賊に襲はれ戦闘が始まつた。ハムレットはその戦ひで自分の勇氣を示そうと思つて、單身劍を提げて敵の船中に乗り込んだ。その間に自分の船は憶病にも逃げ出した。王子を運命の手に残したまゝ。そして二人の役人はハムレットが身代りになる様に書き換へて置いた手紙を

後生大事に持つて大急ぎで英國へと航行した。

王子をその権力内に入れた海賊達は少しも亂暴しなかつた。そして自分達の捕虜が王子である事を知つて、何か親切をして置けば、王子が宮廷に歸られてから自分達の爲に佳い報ひをして下さるだらうと希望しながら、彼等はハムレットを最も近い丁抹の港へ着けて呉れた。ハムレットは其處から王に、自分は誠に不思議な出來事の爲に故國に歸つて來る様になつた譯を知らせ、又明日王の許に歸ると言ひ送つた。王子が宮廷に歸つた時先づ眼に映じたのは悲しい光景であつた。

それは嘗ては深く戀してゐた若くて美しいオフィリヤの葬式であつた。此の娘は哀れな父の死後言ふものは氣が變になつたのである。父があんなに不意に死に、しかも自分の愛してゐる王子の手に依つて殺されたと言ふ事が、この優しい乙女の胸を痛めたのでしばらくの間に全く氣が狂つてしまつた。お父さんのお葬式のためと言ひながら宮廷の婦人達に花を與へたり、或は戀の歌や死の歌を歌つたり、時には自分の身に起つた事なぞすっかり忘れてしまつたかの様に、何の意味もない事を口吟みながら歩き廻つた。小川の上に柳の木が傾いて生へてゐるその葉を水に映じてゐる所があつた。或日その小川へオフィリヤは唯一人で、雛菊や蕁麻いらくさその他の花や雜草等で作つた花環を持つて來た。そしてその柳の枝に花環を掛けようと思つて登つた時枝が折れて、この美しい娘

も、花環も、今迄集めた物も盡く河の中に落ちてしまつた。しばらくは着物に支へられて浮いてゐたその間も、まるで自分のゐる場所も知らないかの様に、或は水の中に住みなれた動物の様に古い歌のいくさりを歌つてゐたが、着物が段々水に染んで重くなり、美しい歌聲は段々と水中に沈んで行つて遂には泥にまみれて哀れにも死んでしまつた。その美しい娘の葬式であつた。兄のレーヤチーズが司式して王や王妃や宮廷の人達が皆出席してゐる所へハムレットが歸つて來たのである。王子は此れが誰の葬式なのかも知らないけれども、そうかと言つて、その式を妨げようと思はずに側に立つてゐた。王子は處女の埋葬の時の習慣の様に、王妃の手で花が墓に撒かれるのを見た。そして王妃はそれを投げながら言つた。

「いさしい人にいさしい花を！そなたの新婚の床を飾らうこそ思へ、そなたの墓に花撒かうこは思はざりし。いさしき娘、そなたこそハムレットの妻なる可き人なりしに。」

そして王子は娘の兄がこのすみれが妹の墓から咲き出でる様に願ひ、遂には悲しみの餘り狂ほしくも墓の中に飛び込んで、自分も共に埋めるために自分の上に土の山を築いて呉れよと叫んでゐるのを聞いた。その時ハムレットに此の美しい娘に對する戀が新らに歸つて來た。そして兄がそんなに悲しみのために正氣を失つてゐるのを見てゐる譯には行かなかつた。自分は四萬の兄よりも

つこオフイリヤをより深く愛してゐると思つてゐた。それで急に姿を現してレーヤチーズの這入つてゐる墓の中へ、同じ様に、いやもつこ狂ほしく飛び込んだ。レーヤチーズはそれが自分の父や妹を殺すに至つたハムレットである事を知ると、敵の様にその喉を占めたが、すぐに側の者がそれを分けた。ハムレットは葬式の後自分が軽々しくもレーヤチーズと競争するかの様に、墓に飛び込むと言ふ無分別をした許しを乞ふた。それは自分のオフイリヤの死に對する悲しみが誰にも劣らない事を欲したために止むを得なかつたのだと言つた。そして暫くは二人の青年は仲直りをしてゐた様に見てゐた。

然しハムレットの邪惡な叔父である王は、レーヤチーズの父オフイリヤの死に對する怒りも悲しみとを利用して、ハムレットを殺させよう工夫をした。王はレーヤチーズにけしかけて、平和と仲直りをした風を見せて、親しげにハムレットに擊劍の試合を申し込ませた。ハムレットはそれを受けて日は定められた。此の仕合には宮廷の者は皆出席した。レーヤチーズは王の指圖に従つて毒を塗つた劍を用意した。此の仕合には、ハムレットもレーヤチーズも共に此の道の達人として知られてゐたので、廷臣達は多額の賭をした。ハムレットは全くレーヤチーズの奸計などを疑はず、又レーヤチーズの武器が擊劍の規則通りの仕合刀でも、鈍刀でもなく、尖さきがあり、毒を塗つた刀を

使つてゐる事なども調べもせず、自分は仕合刀を取り上げた。初めの間は普通にレーヤチーズは、ハムレットと渡り合ひ、幾分弱味を見せる様な事をした。それを白々しくも王は褒めそやし、限りなく頌揚した。そしてハムレットの成功のために祝盃を挙げ、また高額の賭をした。然し二三回の後、レーヤチーズは勢込んでその毒刃を以てハムレットを激しく打ち致命傷を負はせた。ハムレットは激怒して然しこの悪謀の企てをも知らずに立廻りの最中に、自分の武器とレーヤチーズの怖ろしい武器とを取代へて、その劍を以てレーヤチーズに一刀を報いた。これでレーヤチーズは自分の奸計に自ら陥つたのである。その時王妃が毒を吞まされたと叫び出した。王が、ハムレットが仕合中に、喉を渴かして飲物を欲しがる様な時の用意にして置いた盃を不注意にも王妃が飲んだのである。その中には若しレーヤチーズが負けた時にも大丈夫な様に邪悪な王が怖ろしい毒を盛つて置いたのであつた。王は王妃にその盃に就て注意を與へて置く事を忘れたのであつたが、王妃はそれを飲むとすぐ毒殺されたと言ふ最後の言葉を叫んで死んでしまつた。

ハムレットは誰か叛逆者のゐる事を疑ひ扉を閉ざせと命じて、それを探し出さうとした。レーヤチーズは自分が謀返人であるからもう探す必要はないと言ひ、ハムレットに加へられた傷のため自分の命が段々になくなつて行くのを感じたので、自分が用ひた奸計の凡てを、又自分迄がその悪計

に陥つた事を白狀し、刀の尖に毒を塗つた事、どんな薬もそれをや愈す事が出来ないからハムレットは半時間と過ぎぬ間に死ぬだらうと言つた。そしてハムレットの許しを乞ひながら、最後の言葉は此の陰謀を作り出した王を呪ひながら死んだ。ハムレットは自分の最後が段々と近付いて来るのを知り、劍の尖には未だ毒が残つてゐるのを見て、不意に邪悪な王の方をふり向いて、心臓めがけてその刀を突刺した。斯くして今や父の亡靈との約束は果たされ、その命令は成就され、父の無憾な暗殺は遂に眞の暗殺者に報ひられた。ハムレットは自分の呼吸が段々と切迫して来るし、又自分の生命がなくなりつゝ、あるのを感じて此の悲劇の最初からの見物である親友のホレーシオの方を向いて、苦しい呼吸の下から、自分の物語りを世の中に告げるために生き延びて呉れよと願つた。(ホレーシオが自分も王子と共に死なうとする風を見せたからである。) そこでホレーシオは凡ての事情の祕密を自分は知つてゐるから、事件の真相を傳へよう約束した。斯くて貴いハムレットの魂は消れて行つた。ホレーシオ及び傍聴してゐた人達は涙のうちに此の尊い王子の靈を天使の加護の下にあれと祈つた。ハムレットは優しい立派な王子であつたのだから、又その氣高い王子らしい性質とに依つて人々から深く愛せられてゐた。若し生きてゐたならば、丁抹の最も尊い最も英明な君主となつた事は疑ひなかつた。

オセロ 七 回

ベニスの富豪で元老院議員、ブラバンシオには優しいデスデモーナと言ふ美しい娘があつた。その娘の高徳を慕ひ、或はその富を得ようとして、様々な求婚者がやつて来た。然し自分と同じ容色を持つた同國人の間には一人もこれと思ふ程の男は見當らなかつた。此の令嬢は人の風貌よりもその心を尊び、人の真似をするよりも、人から褒められる様な非凡な特性を望んでゐたので、自分の愛情の對象として、父が愛して家にもしばしば招待した事のある一人のムーア人の黒奴を撰んだのである。

決してデスデモーナが自分の戀人として撰んだ男が不適當である言つて責める事は出来ない。此のムーア人のオセロは色が黒い點を除けば、何んな立派な婦人にでも推舉する事が出来る程缺點のない人であつたからである。オセロは軍人であつた、しかも勇敢で、トルコ軍との大激戦の際武功を立て、ベニス軍隊の大將に昇進され、國家からも重要視されてゐた。

オセロは以前は旅人として来たので、デスデモーナは（令嬢の常として）旅人がずつとずつと以前の経験から語り出す冒険談を聞くのを喜んだ。彼が今迄に經て来た合戦、包圍、大接戦、或は

陸に海に彼が身をさうした幾多の危険、大浪にさらわれた時又は大砲の口に向つて進軍した時の危機一髪の間を脱れた事から、自分が暴慢な敵に捕はれて奴隷に賣られた事、其んな状態でこんな恥を忍んだか、何うしてそれを脱走したか等を物語つた。そしてその話の間には異國で見た不可思議な事物の話をも附加へた。廣大無邊な沙漠や物語りめいた大洞窟、石の山、雲に頂を没した岩や峯、野蠻な土人達、人を食ふと言ふ食人種、肩から下に頭がついておるアフリカの土人達など、此んな旅人の話は非常にデスデモーナの注意を惹いたもので、若しその間に何か家の用事で呼ばれたりすると、大急ぎでその用を果たして返つて来て、貧る様にオセロの話に耳を傾けてゐた。そして或時彼が暇なのを利用して娘は今迄澤山聞いたが、皆斷片的であつたのでオセロに身の上話をすつかり始めから話してほしいと願つた。オセロは直ぐにそれを承知した。青年時代に受けた災害の節々を物語る時等には、娘の流す涙に依つて慰められた。

身の上話が終ると娘はオセロの苦難に對して歎息の世界を報いた。凡てがまた何といふ不思議に、又哀れつほい、恐怖に満ちた哀話であるか言つて美くしい誓の言葉を言つた。娘はこんな話を聞かなければよかつたと望んだが、然し又天が自分のためにこんな人物を作つて呉れたのを喜んだ。そしてオセロに禮を言ひ、又若し自分に戀してゐる友達があるなら、その友達に如何に話を初語る

可きかを教へておやりなさい、さうすればそれが求婚になるだらうと語つた。慎み深さを失はずに、心を蕩かす様な美しくしさを見せ顔を赧らめて言つた此の暗示を、オセロは解せない筈はなく、もつと明らかに自分の意中を打明けて、此の又さもない機會に此の氣高い令嬢デスデモーナから、秘かに結婚すると言ふ同意を得た。

オセロの顔の色と言ひ又その財産と言ひ到底ブラバンシオが自分の娘の婚して承諾するだらうと言ふ事は望めなかつた。父は娘を自由にして置いたが、娘は間もなくベニスの貴婦人の風習に従つて議員階級或はその見込のある夫を撰ぶだらうと豫期してゐた。然し此の期待は外れた。デスデモーナはこのムーア人を愛し、色は黒かつたけれどもその男の勇ましい性質と行動に自分の心も財産も凡てを委せた。自分の夫として撰んだ男に全身全靈を捧げたので、此の令嬢以外の人にとつては打勝つ事の出来ぬ反對的であるオセロの顔色の如きも、この明敏な令嬢の眼には、自分の求婚者であるベニスのあらゆる青年貴族達の色白や美しい顔よりも尊く映じたのであつた。

兩人の結婚は極く秘密に行はれたのではあつたが、さう長く秘密がばれない筈もなく、遂に老ブラバンシオの耳に入つた。老人は元老議會に出て行つて、魔法や妖術を以て（老人はそんな風に申立てた）自分の美しい娘デスデモーナの愛を誘つて父の許しをも乞はず、又厚意に事を缺かして

結婚させてしまつたムーア人、オセロを訴へた。

此の際丁度ベニス國はオセロの援助を直接必要とする事件が起つた。トルコ軍が大軍を整へて艦隊を艦装し、當時ベニスの所有であつた要塞地サイブラス島を、ベニス人から取り返さうとしてその島目掛けて進軍しつゝ、あると言ふ報知が來た。此の事變に際して國家は、トルコ軍に對抗してサイブラス島を守備し得る者はオセロ唯一人であるを眼を注いだ。そこでオセロは元老議會に呼ばれて、國家の危急を救ふ候補者として、同時にベニスの法律に依つて列刑に處せらる可き罪人として立つたのである。

ブラバンシオの老齡と議員としての資格とから、議員達は熱心に老人の陳述を聞かねばならなかつた。然し氣の轉倒した老人は證明のために色々例を引いたりして、無暗にオセロを悪く告訴した。オセロは辯明せよと言はれた時、上述し求婚の始末を悉く物語り、少しも飾り立てずに申し述べた。オセロがかくも高尚に簡單に語つたので（それこそ本當である證據だが）議長席にゐた公爵は、今言つた様な工合に話を語つたならば自分の娘でもまた結婚の許しを與へるだらうとの驚嘆の聲を洩らさずにはゐられなかつた。そしてオセロが求婚の時に用ひたと言ふ魔法は、戀をする男の正しい方法に外ならなかつたし、オセロが用ひた妖術は唯令嬢の耳に優しい話を語つたに過ぎなか



つた事が明となつた。

此のロオセーの陳述はデスデモナー自身の證明に依つて益々確實になつた。デスデモナーは法廷に出て生を受け教育を授かつた父に對する自分の義務を述べ、そして主人で、夫であるオセロに對するもつと重大な義務を述べたいと父の許しを乞ふた。丁度デスデモナーの母がその父よりもその夫、ブラバンシオを重んじた様に。

老議員は最早や抗辯する事も出来ず、如何にも悲しげな表情を以てムーア人を呼びよせ、仕方なしに、若し自分が娘を勝手に抑へてゐる事が出来るのならば、何時迄も自分と共に置いておくのと言ひながら、娘をオセロに與へた。そして自分は心中他に子供の無かつた事を喜んでゐる、デスデモナーの行ひが自分の心を暴王に彼等を窮屈に取締つたかも知れないからと付け加へた。

此の難題が解決したので、常に戦争にばかり出てゐてその習慣の爲にオセロには、軍隊生活の難儀が他の人にまつての食物や休息と同じ様に必要なものになつてゐたので、すぐ様サイブラス島の戦争の指揮に従事した。そしてデスデモナーも自分の夫の名譽を重んじて（危険な事ではあつたが）新婚の人々が常に安佚をむさほつてゐるにも拘らず、喜んで夫の出征を承諾した。

オセロ夫妻がサイブラスに上陸するや否や、怖ろしい嵐の爲にトルコ軍が散々に破られたと言ふ

報知が來た。それでその島は當分何者にも攻撃を受けないと判つた。然しオセロの出會はねばならぬ戦はその時始まりつゝあつた。無實の妻に對して惹き起された悪意の敵は、その本質に於て野蠻人や邪教徒よりも怖る可きものであつた。

オセロの友人達の中でカシオ程信用を得てゐたものは無かつた。ミカエル、カシオは若い兵士でフロレンス生れの陽氣で多情な面白い話し振りの女の好きさうな性質を持つてゐた。その上美しく話が甘くて、年をまつてゐて（オセロもさう言は言へる）若い美しい妻君を持つてゐる男の嫉妬心を惹き起すに充分な男であつた。然しオセロは高尚な心を持つてゐたから嫉妬心など起さず、賤しい行をせないから從て他人をも少しも疑はなかつた。オセロは此のカシオにデスデモナーとの戀の取持ちをさして、求婚の仲介者の役をしてもらつた。オセロは自分には婦人を喜ばす様な優しい話が出来ないのを怖れ、その性質がカシオに具はつてゐるのを知り、常にカシオに自分の爲に求婚して貰つたのであつた。その様な無邪氣な單純さは勇ましいムーア人の缺點と言ふよりもむしろ名譽でも言ふべきであらう。だから優しいデスデモナーがオセロの次にカシオを愛し且つ信じてゐたのも不思議ではない。（然し遠くから見れば最も徳高い妻であつた。）そして兩人が結婚してからもミカエル、カシオに對して少しも元の態度を變へなかつた。カシオは常に彼等の家に入出入した。

自由で標輕な話しはオセロの様な少し氣むつかしい性質の人にこつて不愉快なものではなかつた。そんな性質の人は常に自分の性質の壓へつけるやうな重々しさを和けるためにそれと反對な人の話を喜ぶものである。そしてカシオが友達の爲に求婚に來た時の様にデスデモーナとカシオも語り合ひ、共に笑ひ合ふのが常であつた。

オセロは最近カシオを、副官にして大將の側に最も接近してゐる信任の地位に昇進させた。この昇進は老士官イアゴーを非常に怒らした。イアゴーは自分がカシオよりも最つこ適當であるを考へてゐた。そして常にカシオの事を婦人達との交際にのみ適してゐる男だとか、戦術だとか如何に軍隊を指揮するかと言ふ事は娘よりも知つてゐない男だなど嘲弄してゐた。イアゴーはカシオを憎み、オセロをも悪んでゐた。オセロがカシオを寵愛するため、又一方ではオセロを憎む餘り取上けてゐた、ムーア人オセロがイアゴーの妻エミリアを深く愛してゐると言ふ根もない疑惑のためであつた。此の假空的な物議から奸惡なイアゴーは、カシオやムーア人オセロやデスデモーナの三人を一所に破滅せしめようと言ふ怖ろしい復讐の計畫を考へ出した。

イアゴーは奸智に長けてゐて、然も人間の性質を深く究めてゐた。人間の心を苦惱せしめる苦痛の中で（肉體的苦痛等は比べものにならない）最も堪へられないそして最も痛い針は嫉妬心である

事を良く知つてゐた。若しオセロにカシオに對する嫉妬心を起させたならば、それ程精巧な復讐はないを考へた。カシオが死なうと、オセロが死なうと、兩人共死なうとそんな事には何の頓着もしなかつた。

大將夫妻がサイブラス島に到着した時に、敵の艦隊が四散したと言ふ報知が來たので、島ではお祭りの様な騒ぎが起つた。あらゆる人々はお祭り騒ぎに夢中になつて陽氣に騒いだ。酒は洪水のように酌まれ、盃は黒いオセロやその美しい妻のデスデモーナの健康のためにしきりに酌み交された。

其の晩カシオはオセロの命令で兵士共が酒を呑み過ぎして喧嘩等を起して島の住民等を驚かさないうやうに、或は新らしく上陸した兵士共に嫌はれる様な事がないやうに監督の任に當つてゐた。其の晩イアゴーは長く考へてゐた悪計を初めた。イアゴーは大將に對する忠愛の口實の下にカシオを誘つて無暗に酒を呑ませた。（監督の士官にとつてあるまじき事である）カシオは色々断つたのであるが、どうしてもイアゴーの巧な正直さうな申出を拒絶する事が出來ないで、次から次へと盃を傾けた。（イアゴーは酒をついで歌を歌つて元氣をつけた。）遂にカシオは繰返し繰返しデスデモーナを讃めて、その健康を祝し、デスデモーナを世にも稀な美人だといひ切つた。遂に口へ

注ぎ込んだ敵(酒)が頭を奪ひ取つてしまつた。そしてイアゴーが申しつけて置いた男が何か一言無禮な事を言つたので、劔を抜いた。二人の争ひを和めようとして仲に入つた有爲な士官、モンタナを傷けた。騒ぎは段々広がつた。此んな騒動を起させたイアゴーは、もつここの騒ぎを廣めようと(まるで酒呑みの喧嘩ではなく危険な暴動でも起つたかの様に)城の鐘を打鳴らさせた。その警鐘の音にオセロは目を覺して、急いで着物をつけ現場へ駆けつけ、カシオに原因を尋ねた。カシオは今や酒の酔も少しさめたので我に返つたが、餘り恥しくて答へる言葉を知らなかつた。イアゴーはカシオを訴へるのを非常に心もとなく思ひながらも、事實を知らうとするオセロの爲に餘儀なくせられたかの様に装ふて、事件の凡てを物語つた。(勿論自分の關係してゐる事はカシオさへ知る由もないから除いた)そしてカシオの罪をなるだけ軽く見せようとしながら、實際は本當より重く見せようと努めた。その結果軍旗を嚴格に守るオセロは、止むなくカシオから副官の地位を奪つた。イアゴーの第一の策略はうまく成功した。自分の憎んでゐる競争者を謀を以て陥れて、その地位から放り出してしまつた。然し此の不幸な夜の内にまだ多くの陰謀が行はねばならぬのである。

此の出来事のためにすっかり酔が醒めたカシオは、偽りの友イアゴーに自分が獸にも劣る様な振

舞をした事を悔いた。カシオは地位を失つた。何うして元の地位に再び返して呉れ等と大將に願へやうか、酔つぱらつてやつたことも言へない。カシオは自らを蔑んだ。イアゴーは慰める風に見せかけてカシオばかりでなく誰でも人間である以上は時には酒を飲みもすると言つた。斯くなつたからは善後策を講ずるより外に策がない。今では將軍の奥方が將軍であるから、オセロはその意のままになる。將軍の仲裁をデスデモーナ夫人に願つた方がよいだらう。夫人は寛大な、動かされ易い性質だから此んな風の事には喜んで盡力なさるだらう、そしてカシオは一度大將の氣に入りになれるだらう、そして兩人の信愛の破壊は元よりも固く結び合されるだらうと言つた。イアゴーのこの忠言は、後に解る様な計略のために言はれたのでなければ、如何にも立派なものであつた。

カシオはイアゴーの忠言通り、デスデモーナ夫人に頼んだ。夫人は眞面目な願であれば容易に聞き入れる性質であつたので、カシオにきつと自分が辯護人となつて主人に説き、若し此の事件を棄てる程ならば死んだ方がまださへ言つた。そして夫人はすぐさま熱心に又優美に、カシオを極力憎んでゐるオセロもとてもはねつける事の出来ぬ程説きつけた。オセロが時日の猶豫を求め、あれ程の罪人をさう早く許す事は出来ぬと言つても、少しもひるまず、明晩か明後日の朝か何んな事があつても明後日の朝までに決めてほしいと主張した。それから哀れなカシオがどんなに後悔し

卑下してゐるかとか、彼の罪には罰が重すぎる等と言つた。それでも尙オセロが躊躇してゐるので夫人は言つた。

「まあ！オセロ、私にはカシオのために辯護せなければならぬ譯があるのです。ミカエル、カシオはあなたのために求婚に来て、私があなたの事を悪しざまに言つても、いつもあなたの肩を持ちました。こんな事は何でもないぢやありませんか、本當にあなたの心を試さうとするのなら、それこそつみ重い難題を願ひますは。」

斯う言はれ、ばオセロもも早意地張る事も出来ず、しばらくの猶豫を乞ふて、カシオを元通り寵愛しようゝ約束した。

オセロとイアゴーがデスデモーナの居る室に這入つて行つた時、丁度今迄夫人に仲裁を頼んでゐたカシオが向ふの入口から出て行つた。イアゴーは奸智に長けてゐるので、わざと聲を低めて獨語のやうに、「どうも氣に食はぬ」と言つた。オセロはイアゴーの言葉を、大して氣に掛けはしなかつた。實際夫人とすぐ話をし始めたのでそんな考へは頭からすぐ消れてしまつたのだ。然しオセロは後になつてからそれを想ひ出したのである。デスデモーナが去つて後、イアゴーは、唯物好きから尋ねて見る様な顔をしてオセロに求婚の時からミカエル、カシオは二人の戀を知つてゐたかと尋ね

た。大將は然うだま答へて、求婚の時分にはよく二人の仲介をして呉れたものだと言つた。イアゴーは何か怖ろしい事件に新らしい端緒をでも得た様な風に額を打つて、「え、實際？」と叫んだ。此の言葉がオセロの頭に、イアゴーが室へ這入る時に言つた言葉や、デスデモーナがカシオと一緒に居つたらしい様子等を思ひ起させた。そして何かこれには意味があるのだらうと考へ始めた。オセロはイアゴーが正しい男であり、愛と誠實に満ちた人であると思ひ込んでゐたので、奸臣の悪計もオセロには、何か口に出せない程大事件のために、正直な心が自然に現れたのだと思つた。それでオセロはイアゴーに知つてゐる事はどんな悪い事でも關はずに言つて呉れと願つた。

「え、どんな立派な宮殿へも穢いものが這入り込まぬ譯にはゆかぬやうに、私の胸にどんな邪しまな料簡がはいらないとも判らぬでは御座いませんか。」

イアゴーは尙言葉を續けて、オセロが充分觀察をしてをらないために、難儀な事が起つて來たらどんなに困る事だらうとか、オセロの心の平知のためには自分の考へを言はない方が佳いとか、軽い疑ひのために人の名譽をそこなつてはいけない等と、思はせ振りを言つた。そしてオセロの好奇心が此等の暗示や切れ切れの言葉に依つて段々と昂められて殆んど惱亂せんばかりになつた時、イアゴーはあたかもオセロの心の平和を深く懸念する様に、嫉妬心を起してはならないと戒めた。

此の様に巧に、疑ひを消させる様な風を見せかけて忠告しながら、その忠告で却つて益々不用意なオセローの疑ひをひき起した。オセローは言つた。

「わしは妻の美しい事をよく知つてゐる。又友達や宴會を好み、自由に話し、歌ひ、音楽を奏し、よく踏る。然し淑徳が伴うてゐる限り、これ等は皆よい事ぢや、妻の不貞を疑ふ前に先づその證據を得たい。」

そこでイアゴーはオセローが自分の妻の罪を仲々信じない事を喜ぶ振りをして、明らかに自分は證據は持つてはゐないが、カシオが側にある時の夫人の振舞に注意を拂つて御覽なさいと言つた。自分にはオセローよりもよく同國人である伊太利の婦人の性質を知つてゐるが、餘り疑つてもいけないが又餘り油斷をしてもいけないと言ひ、ベニスでは妻君達は夫には見せない様な悪戯をも天には隠さないなどと言つた。其の上尙巧みにデスデモーナがオセローと結婚する時、如何に巧みに、父親が魔術でも使つたのではないか疑つた程父を偽つたかをほめかしたので、オセローは此の説に非常に動かされ、益々此の事を思ひ悩んだ。若しデスデモーナが父を欺いたのならば、何うして夫を欺かないと言ひ得よう。

イアゴーが氣にさわつたら許して呉れと言ふと、オセローは實際はイアゴーの言葉のために心中は

狂はんばかりであるのだが、何氣ない風を装つて、もつこ話して呉れと言つた。イアゴーはそれでも友達だと言つてゐるカシオの事を悪く言ふのは本意でないかの様に色々と申譯を言ひながら語り續けた。そして段々ミ事件の要點に觸れて、デスデモーナが自分ミ國を同ふし容色を等しくする人々からの良縁を退けて、やゝ不自然の様に思はれるムーア人ミ結婚したのは如何にも彼女の執拗な意志を持つてゐる證據であると言つた。そして若し彼女のよい判断が歸つて來たなら、オセロー自分國の若い伊太利人の立派な色白い容色とを比較するのは當然であると言つた。最後にイアゴーはオセローにカシオとの和解を今少し延ばして、しばらくの間デスデモーナがどんなに熱心にその仲裁を取りなすかを注意したならば、もつとよく判るだらうと言言を與へた。斯くも邪惡な巧妙さを以て罪もない婦人の優しい性質を破滅に導かうとし、婦人の眞實な好意を婦人自身を良に陥れようとした。先づカシオに仲裁を懇願させて、その仲裁から、ひいて婦人の破滅を畫策したのである。

イアゴーはオセローに、もつこ確實な證據が擧がる迄夫人の無實を信する様にと願ひ、オセローも忍耐すると約束してその談話は終つた。然しその瞬間から欺かれたオセローは心の平靜を味ふ事が出来なくなつた。罌粟も曼陀羅華の汁も、世界のどんな眠り薬も、昨日まで享樂してゐた様なあの快い休息を與へては呉れなかつた。オセローは自分の職務がいやになり出し、最早軍隊には興味がなくな

つた。今迄は軍隊を見、軍旗や戦陣を見る毎に鼓動が高まり、太鼓や喇叭の音、軍馬のいなゝきに武者振ひした胸も、軍人精神の精華であるあらゆる誇りも大望とを失つたやうに見えた。軍人的精熱やありし昔の歡喜も消えてしまつた。オセロは時には我が妻を正しいと思ひ、時には不貞なりと思ひ、時にはイアゴの言を信じ、時にはそれを疑ひ、遂にはその事を知らねばよかつたと考へた。若し知らなかつたならば妻がカシオを愛しておつても大して苦にはならなかつたらうなど悔いた斯く惱亂した餘り心も千々に碎けて、オセロは或時イアゴの咽喉を占め、若しデスデモーナの罪の證據を與へねば、自分の妻を欺いた罰として直ちに殺してしまふぞと嚇した。イアゴは自分の正直な言葉が欺りのやうに見做されるのを怒るかの様に装うて、オセロに夫人がいつか毒の模様のあるハンカチーフを持つてゐたのを見た事はないか尋ねた。オセロはそれは自分が與へた最初の贈物だと答へた。

「あれと同じハンカチーフで今日ミカエル、カシオが顔を拭いてゐたのを見ました。」ミイアゴが言つた。

「若しもお前の言ふ通りならば、予は天罰の下る時なきをぐずぐずと待つてはゐない。先づお前の忘信のしるしとして三日以内にカシオを殺さう。あの美しい悪魔めは(デスデモーナの事)何か速かに殺す工夫を考へ出さなきやならない。」

空氣の様に軽い些細な事も、嫉妬心には聖書の文句よりも重んず可き證據となる。自分の妻のハンカチーフをカシオが持つてゐたと言ふだけの事が、オセロをして、カシオがどうして手に入れたかを一度も尋ねさへせずに、二人の死を宣告する程欺くに充分な動機となつた。デスデモーナは決してカシオにそんな贈物をした事もなければ、此の淑徳の婦人が自分の主人を欺いて夫の贈物を他の男に與へるなどと言ふ無法な事をしよう筈もなかつた。カシオもデスデモーナも共にオセロに對しては何の罪もなかつたのである。實際は常に心を悪事の策略に働かしてゐる邪しきイアゴが自分の妻に(良い女だが氣が弱かつた)それを寫すのだと言つて盗ませて、事實はそれをカシオの通る道に落して置いて、それをデスデモーナがやつたのだと言ふ自分の暗示に適應させようとしたのであつた。

オセロはそれから間もなく妻に出會つたので、頭痛がすると言つて(實際したのかも知れない)頭をしぼるのにハンカチーフを貸して呉れと言つた。妻はその通りにした。

「これぢやない予がお前にやつたのだ。」

デスデモーナはそれを手許に持つてゐなかつた、(前にも言つた様にそれは盗まれたのだから)

「何うしたのだ、あれを失くしたら大變だ。あのハンカチーフは、魔法を使ふて人の心を讀む事が出来るといふエジプトの女が予の母に呉れたのだ。その女が言ふのに、此れを持つてゐる間は母は愛らしくつて父から愛せられるだらうが、若し失へば又は他人にやれば、父の考へが一變して、今迄愛してゐたと正反對にそれ丈憎むやうに到るだらうと。母は死ぬ時分にあれを予に與へて、若しお前が結婚したらそれを妻に與へよと言つた。だからお前にやつたのだ、用心なくちやいけない、お前の眼よりも大切にしなくちやいけない。」

「まあ、本當ですか。」

「本當だとも、あれは魔法のハンカチーフなんだ。二百年程前に住んでゐた神巫が、神に乗りうつられてこしらへたもので、神聖な蚕の糸で造られ、少女の心臓の木乃伊で色を染められたものなのだ。」

デスデモーナはハンカチーフの不思議の功德を聞いて、怖れの餘り死なうかとさへ思つた。明かに盗まれたのだと知つてゐたから、同時に亦夫の愛情の變化をも怖れた。そこでオセロも大に驚き何か亂暴をもし兼ねない様子に見わたが、尙執拗くハンカチーフを出せと言ひ續けた。然しデスデモーナは仕方ないので夫のむきな考へを他にそらさうと考へて、夫がハンカチーフの事を執拗く言

ふのは唯ミカエル、カシオの事件をまぎらせる爲なんだらうと陽氣に語り出して、(イアゴの言つた通り)カシオの事を褒め續けたので、オセロは益々狂はしくなつて室から飛び出して行つた。そこでデスデモーナは本意なくも夫が嫉妬してゐるのではないかと疑ひ始めた。

何う言ふ理由で夫が自分を疑ふのかデスデモーナには判らなかつた。そこで自分の尊敬するオセロを疑つたのを悔ひて、ベニスあたりから何か面白からぬ報が傳はつたのか、それとも國家の難題が夫の精神を亂して、夫の氣分を前の様に晴々とさせないのだらうとも考へた。

「いや、男は神様ではない、婚禮した當座通り常に親切を盡して貰はるゝものと思つてはならぬ。」

そして自分が夫の不親切をあのように悪く解した事を後悔した。

再びオセロとデスデモーナが出會つた。今度はオセロは明らかに妻の不貞を責め、他の男を愛する事を非難した、が誰だと言ふ事は言はなかつた。そしてさめざめ泣いたので、デスデモーナは「まあ、どうなさつたのです、何故お泣きになるのです。」

オセロは、自分は何んな困難にても堅く忍耐する事が出来る、貧乏でも病氣でも恥辱でも。然し妻の不貞にはすつかり心を破られてしまつたと言ひ、妻の事を色も香も美しくつて、五感を魅す

る程であるが毒草だと呼び、そして彼女が生れて来ておらなかつたらよかつたまで罵つた。オセロが去ると此の無實な婦人は、夫の根もない疑ひに打ち驚いた餘り氣を失つて、重いく／＼眠りに襲はれたので、自分の床をのべる様に召使に命じ、幼子に物を教へる人は物やさしう容易い事から始めめるものである。オセロが叱るにせよさうするのが當然だ、ほんこに自分は叱られる時はまだ只の子供だもの、と言ひながら、今晚は結婚式の日の敷布を掛けて置いて呉れとたのんだ。唯これだけが此の優しい婦人が言つた不平であつた。

デスデモーナは夫が自分に従つて来るものと思つて寢床へ退いたが、氣が疲れてゐたのですぐに眠りに落ちた。その時オセロは、妻を殺してしまはうと言ふ非道な考へに思ひ惑ひながら寢室に這入つて來た。然し妻の眠つてゐるのを見た時、妻の血を流すまいと思ひ、雪花石膏ソルベトよりも白い妻の美しくい皮膚を傷つてはならぬと思つた。然し殺さねばならぬ、生かしておいたら、自分を欺した様にまた他の男を欺すであらう等と考へた。そして最後だと言ひながら、キッスをしたが、まだあきらめかねたのかも一度キッスした。そして涙を流したがそれは醜い涙だと呼んだ。

デスデモーナはそのキッスに眼をさました、そしてオセロの顔を見上げると、オセロは下唇を咬んで眼をぐる／＼廻してゐた。それはオセロの絶對絶命の場合にやる表情だつた。そしてオセロは妻に死ぬ覺悟をしてその魂までも殺さないから祈りをせよと命じた。無實の妻は夫に泣きすがつて同情と慈悲とを乞ひ、自分の罪を知らせて呉れと願つたので、夫はカシオの名を言ひ出し、妻が與へたハンカチーフの事を持ち出した。それで夫人がその言ひ開きをしようとしてゐた最中に、オセロはもう話しを聞かないで、不意に妻を夜具の中に卷込んでしめ殺してしまつた。

丁度その時、一方ではイアゴーが自分の手下の一人に命じて暗殺させたカシオが、傷いて血まみれのまゝこの家に運び込まれた。然しイアゴーの手下は（傷を負はせたが致命傷ではなかつた）カシオを殺す事に失敗した。そして露見する事を氣づかつてイアゴーはこの男を殺してしまつたが、その男のポケットから手紙が発見されて、イアゴーの罪が明かになりカシオは凡ての疑ひが解けて無實であつた事が判つた。そして今やカシオはオセロの所へ罪を謝しに來て、オセロにイアゴーをして自分を殺させようとした自分の罪と言ふのは何であるか尋ねた。

此の事實はオセロにとつては雷の様に響いた。そして今や自分が人殺しである事、自分の妻（哀れな無實の婦人）が常に自分に貞節であつた事を知つて、苦悶の餘り生きて居る事も出來ず、劍に身を貫き、愛する傷いた妻の屍の上に身を投げて息を引き取つた。

此の様な突發事件は見てゐた人々に驚愕と恐怖との感情を起さした。オセロは今迄仲々評判がよ



く、悪人の詭計に乗せられるまでは一度も人を疑つた事なく、親切な愛す可き夫であつた。オセロは賢くは愛さなかつたが、深く愛した。そして彼の男らしい眼は（自分の誤解を知つた時）小事に泣いた事などは殆んどなかつたのだが、アラビヤの木がゴム汁を流すよりも早く涙を流した。オセロが死んで後はその徳や勇敢な行ひが言ひふらされた。そしてオセロの後繼者に殘されてゐた仕事は唯イアゴトを（最も重い死刑に處せられた）出来る限りの嚴罰に處し、令名ある將軍の惜しむ可き死をベニスの宮廷に報知する事だけであつた。

### ペリクレス

タイルの王ペリクレスは、アンテイオカスと言ふ邪悪な希臘の皇帝が、自分が秘かに計畫した恐ろしい陰謀を王に見破られたのを恨んで、王の國民やタイルの街に怖ろしい災難を加へようと嚇したので、その禍害を避けるために、自ら國外に放浪の旅に上つた。眞に權力ある者の隠れた罪を探し立てする事は危険な事である。ペリクレスは自分の國內の政治を盡く、才能あり正直な大臣ヘリカヌスに委せて、權力比ひないアンテイオカスの怒りが和らぐ時迄歸るまいと考へつゝ、タイオルから船を乗り出した。

先づ王が船の進路を選んだのはタルサスであつたが、タルサスの市街が丁度その時非常な飢饉に苦しんでゐると聞いたので、それを救済するためにと澤山の食料を積んで行つた。其處へ着いて見ると市街は窮乏のどん底に陥つてゐた。王の來たのはまるで天よりの使が思ひ懸けない救助に來た様に思はれて、タルサスの知事クレオンは限りない感謝を以て王を迎へた。ペリクレスが此の都市について數日も経ない内に、王の忠實な大臣達から手紙が來て、アンテイオカスが王の住所を知つてその命を取らせるために密使を送つたから、タルサスに留つてゐるのは安全でない警告した。此の手紙を見るやペリクレスは、王の贈つた食料の爲に生き返る事が出來た全市民の祝福や祈りの中に再び海へ乗り出した。

まだ餘り遠くへ行かない前に、船は怖ろしい嵐に襲はれて、ペリクレスを除く外の船員達は凡て死んでしまつた。王も潮の爲に裸體になつて知らない岸に打上けられたが、しばらくあたりをさまふ内數人の貧しい漁夫達に出會つた。漁夫達は王を自分達の家に入れて歸り、衣服や食物を與へた。そしてペリクレスは漁夫達から此の國の名がペンタポリスであり、王がその平和な統治と良い政治の爲に普通にシモニデス善王と呼ばれてゐるシモニデスであると言ふ事を聞いた。又そのシモニデス王には唯一人の、美しい娘があつて、明日がその娘の誕生日になるので、宮廷で盛な馬上仕合

が開かれて、多くの王子達騎士達が方々から集つて来て、その美しい王女テイサの愛を得んために、互に武術を競ふのであると言ふ事をも聞いた。此の語を聞いて秘かに自分の立派な武具が無くなつたので、この勇ましい騎士の一人となつて出て行く事が出来ないのを悔んでゐた時であつた。他の漁夫が綱を共に今海から拾ひ上げた完全にそろつた一組の武具を持つてやつて来た、それは王の相違なかつた。ペリクレスは自分の武具を見ると言つた。

「有難い、有難い、惨々な不幸に出逢つたが、あなたがこれを呉れたので私は元の自分に戻れる様になつた。此の武具は私の亡き父が私に残して置いて呉れたので、父を愛する餘りこの武具を私が何處へ行く時にも少しも私の側を離さない程に大切にしているのだ。これを私から奪い取つた荒海も、静かになつたので私に返して呉れたのだ。感謝の外はない。父の贈物さへ元に戻れば私の難船した事などは大した不幸とも思へない。」

次の日ペリクレスは、勇ましい父の武具を身にまこつてシモニデスの宮廷へ往つた。其處で王子は馬上仕合で目覺ましい働きをした。我こそはテイサの愛を得んものと腕に自信のある勇敢な騎士達や勇ましい王子達を皆易々と打負かしてしまつた。宮廷の馬上仕合に勇ましい武士達が王女の愛を得んと戦つて、誰か一人が他の凡てに打勝つた場合には、勇敢な仕合を捧げられた當の婦人は、

その勝者に自分のあらゆる敬愛を表するの習慣である。テイサも此の例に漏れず、直ちにペリクレスに打負かされた凡ての王子や騎士を退散させて、ペリクレスに特別の好意と尊敬を示し、その日の幸福の王として、勝利の花環を頭上にかざつた。そしてペリクレスは一眼見ると直ぐ、この美しい王女を最も熱狂的に戀する一人となつた。

シモニデス善王もペリクレスの勇氣と尊い氣質とを非常に賞讃した。實際王子は完全な紳士であり、あらゆる優秀な技術をよく心得てゐた。それで王は此の見知らぬ男の地位は知らなかつたが（ペリクレスはアンティオカスを怖れたので、タイルの一市民だと言つて置いた）自分の娘の愛情が男の上に深く結ばれてゐるのを見るに、此の見知らぬ勇者を娘の婚ませない譯には行かなかつた。

ペリクレスがテイサと結婚して數ヶ月もたつた、遂に、彼の敵アンティオカスは死んだ。タイルの國民達は王子の長い滯留を待ち兼ねて、今にも革命を起してヘリカヌスを王位に即けようとしてゐると言ふ報知を得た。この知らせはヘリカヌス自身から來たのである。彼は忠臣であるので、自分に捧げられた高い地位を受けずに、ペリクレスに人民の意を通じて國に歸り元の地位に歸る様取はからつたのである。シモニデスにとつては自分の娘婚が（名も無い騎士と思つてゐた）有名なタイルの王子である事を知つて、非常な愕ろき喜びであつた。然し又王はペリクレスが想像し

てゐた様な名もない紳士であつて呉れたならばご悔んだ、と言ふのは斯うなればもう此の立派な娘婚ごも又愛する娘とも別れなければならぬと思つたからである。テイサは妊娠してゐたから荒海に船出する事を王は心配した。ペリクレスも亦安産するまで父と一所に留まるやうにと奨めたが、いとしい王妃は夫と同行しようと思つたので、遂に同伴する事となり、産褥につくまへにタイルに安着するやうに祈つた。

不幸なペリクレスは海には餘程運が悪かつたと見えて、兩人がタイルの町に着かない前に又も怖ろしい嵐に出逢つた。暫くしてから、テイサの乳母リコリイダが、嬰兒を抱いてペリクレスの所へ来て、王子に王妃が子供を産むに直ぐ死なれたと言ふ悲しい出来事を物語つた。そして嬰兒をその父の方へ差出しながら言つた。

「此のお子さんはあそこに置いておくには餘りに小さ過ぎます、此れはあなたの亡き王妃様のお子さんです。」

ペリクレスが王妃の死を聞いた時の怖ろしい悶々の情は口舌のよく盡す所でなかつた。漸く話し得る様になるに直ぐ言つた。

「お、神々さま、どうしてあなたはあなたの尊い贈物を互に愛させたのです、そして直ぐそれ

を奪い取つてしまつたのです。」

「御辛抱なされませ、殿さま。」とリコリイダが慰めた。

「このお嬢さまが亡き王妃さまの残されたお形見で御座います、さうか此のお兒さまのためにもつと男らしくなつて下さい。御辛抱なされませ、殿さま、此の尊いお子さまの爲にだけでも。」

ペリクレスは生れたばかりの嬰兒を自分の腕に抱き上げて言つた。

「お前の生涯はどうか平穩であれ、お前程騒々しい時に生れたものはない。お前の身の上は靜かで穩かであれ！王子の子でお前程この世に生れ出た時、亂暴な歓迎を受けたものはない。お前のこれからの生涯は幸福であれ！お前の誕生を記録するためかのように、天地火風水が號叫したのだから先づ最初からお前が失つたものは（死んだ母の事）お前が今新しく生れ来た此の世で見出すあらゆる歡喜を以てしても償ふ事の出来ぬ程大きなものである。」

嵐は尙猛り狂つた。そして水夫達は死人が船に乗つてゐる間は嵐が決して止まないと言ふ迷信を持つてゐたので、ペリクレスの所へ来て王妃の屍を海へ投げ込む様にと要求した。

「殿さま大決斷を。神よ君を恵み給へ。」

「勇氣は充分ある。予は嵐なども怖ろしくない。最も非道い目に合はされたのだから。然し此

の可愛相な嬰兒の爲に、此の新らしく生れた航海者のために嵐の過ぎる事を望むのだ。」

「殿さま、王妃さまを水葬にせなければなりません、海はあの様に狂ひ、風は吠えたけり、嵐は船中の屍が投げ込まれるまでは決して止まないでせう。」

ペリクレスは此の迷信が如何に薄弱で根拠がないものであるかを知つてゐたが、忍耐強く辛抱して言つた。

「お前達がそれが適當だと思ふのなら、あの最も薄命な王妃は水葬にしてもよい。」

此の不幸な王子はそこで、愛する妻に最後の別れを告げるために行つた。そしてテイサを見て言つた。

「は本當に怖ろしいお産の床に就いた、光も、火も凡てがお前を全く忘れてしまつた。私も亦お前を墓に埋めてや、事も出来ず、殆んど棺にも入れられずに海の中に埋めねばならぬのだ。其處でお前はなきがらの上に立てた墓石の代りに、美しい浪のために沈められてしまふのだ。名もない貝の間に交つて。オ、リコリイダよ、ネスターに香料や、インクや紙や、箱や寶石等を持つて来させ、ニカンダーには縋子張りの棺を持つて来させてお呉れ。嬰兒は枕の上に置いて私か僧侶の様にテイサと別れを告げてゐる間に早く今の用事に行つてお呉れ。」

皆はペリクレスの所へ大きな櫃を運んで来た。王子はその中に縋子の衣に王妃を包み、佳い香のする香料を屍の上にふりまき、その側に高價な寶石と、王妃の身分を書き、若し誰かが此の櫃を拾つたなら王妃のなきがらを埋葬して呉れと書いた紙を入れて、王子自身の手で櫃を海へ投げ入れた。嵐が静まつて後ペリクレスは船員達にタルサスへ向けて航海する様に命じた。

「こてもマイルに着くまで此の子は保たないだらう。だからタルサスで注意深い乳母に托さねばならぬ。」

テイサが海に投げ込まれた嵐の夜が過ぎて、まだ夜も明けきらぬ頃、エフエサスの身分ある紳士で優れた醫者のセリモンが、海岸に立つてゐた時、召使達が浪の爲に陸に打上けられたのだらうと言つて櫃を持つて来た。

「此の海岸にこんな大きな浪の打寄せたのは見た事がない。」

と召使の一人は言つた。セリモンはそれを家へ運ぶ様に命じた。そしてそれを開けて見て、驚いた事には中に若く美しく婦人の屍があつた。そして佳い香のする香料や尊い寶玉の箱等があるの。醫者はこれは誰か身分の尊い人がこんな風に葬られたのだらうと推測した。尙探して見ると紙片が出て来た。それで今、自分の前に横つてゐる屍が王妃であり、マイルの王子ペリクレスの妻であ

る事を知つた。そして此の不思議な出来事に非常に驚き、此んな美しくい夫人を失つた玉子に一層同情した。

「ベリクレスよ、若しあなたが生きてゐるなら、あなたの心は悲しみのために割れてしまつて居だらう。」

さて、テイサの顔を注意して見ると、その顔が如何にも生々として死んでゐる様には見えなかつた。

「皆はあんまり急いであなたを海に投げてしまつたのだ。」

セリモンはどうしても王妃が死んでゐることは思へなかつた。セリモンはすぐに火を起こさせ、適當な興奮劑を持つて來させ、若しも生き返るものならば、興奮した心を幾分和ける事が出来るだらうと思つて静かな音楽を奏でさせた。そしてさうなる事かと婦人の廻りに群がつてゐる人達に言つた。

「さあ諸君、此の婦人に空氣を與へてくれ給へ。王妃は生き返るよ、まだ氣を失つてから五時間と經つてゐない、御覽、息をふき返した、生き返つた。御覽、目蓋が動いてゐるだらう。此の美しい婦人が生き返つたらその悲しい運命を語つて私等を泣かす事だらう。」

テイサは死んではゐなかつた。嬰兒を産む之間もなく氣絶してしまつたので、見た人は皆死んだのだと思ひ込んだ。さて此の親切な醫者の注意に依つて王妃は再び光明に人生とに蘇つた。そして眼を開いて言つた。

「此處は何處です、主人は何處にゐます。何處の國ですか。」

靜かに諄々とセリモンは出来事を説明した。そしてもう大丈夫だと思つた時に夫の書いた紙片と寶玉とを見せた。夫人はその紙片を見るや、

「これは私の主人の筆跡です。海上に船に乗り出した事だけは覚えてゐますが、私の嬰兒を何處へやつてしまつたのかは全く判りません。然し私の夫にもう二度會へないのならば、私はすぐに尼にでもなつてもう樂しみなきを得ようとは思ひませぬ。」

「奥様、あなたの言つておられる様な事をお望みなら、ダイアナのお寺が此處から遠くない所にありますから、其處で尼におなりになつたら佳いでせう。其の上、若し何なら、私の姪と一緒に子供さませう。」

テイサは感謝して此の申出を受け容れた。そして身體が全く元通りになつた時、セリモンは王妃をダイアナ寺院へ入れ、王妃はそこで尼となり、失くつたことを考へておつた夫の追善のため、又當時

の信心深い勤行をして、悲しい日を送つてゐた。

ペリクレスは自分の娘（海で生れたからマリナと名付けた。）を、タルサスへつれて行きその町の知事、クレオンとその妻デオニシアとに托さうと思つた。王子は此の前飢饉で困つてゐた時に救つてやつたから、きつこ此の母のない嬰兒を親切にして呉れるだらうと考へてゐた。クレオンは王子ペリクレスを見、その出會つた大變な不幸を聞いた時、言つた。

「お、殿下の美しい王妃様。天が殿下を助けて、あの御方を連れて來て私の眼を喜ばせて下さいましたなら、ごんなに嬉しう御座いましたらうに。」

「私達は天の命には従はねばならぬ。私のテイサが眠つてゐる海の様荒れ狂ひ、號叫した所で結果は同じ事になつたのだ。私の嬰兒、マリナをあなた方の御慈悲に托さねばならぬ。私はこの兒をあなた方の御手にまかせるから、王女らしく育て、下さい。」

そしてクレオンの妻、デオニシアに向つて言つた。

「奥様、さうぞこの子を私の爲に育て、やつて下さい。」

「殿下、私に子供が一人御座いますが、それよりもつこ大切に育てて申しませう。」  
クレオンも同様に約束して言つた。

「ペリクレス王殿下、殿下の穀物で私共國民が命を助かりました。殿下の尊い御慈悲を（國民は日々の祈禱の内に加へて殿下の爲に祈つてゐます）に對しても殿下の御子様に報ひなければなりません。若し私があるの御兒を疎かにする様な事がありましたなら、あなたに救はれた國民達がそのまゝにはさせて置きますまい。若しもそんな事をしましたならば神様の罰が子孫にまで永久に及ぶでせう。」

ペリクレスは自分の嬰兒が注意深く世話される事を確めたので、クレオンとその妻デオニシアの保護の下に娘を残し、又娘と共に乳母のリコリイダをも残して置いた。王子が出發する時には、マリナは何も知らなかつたが、リコリイダは主人と別れるのを非常に悲しんだ。

「泣くのではない、リコリイダ。泣くのではない、小さな女主人に氣を付けて、今後はあれの身によく仕へるのだよ。」とペリクレスは言つた。

ペリクレスは無事にマイルに着いた。そして再び事もなく元の玉座に座つた。死んだと思つてゐる哀れな王妃がエフェサスに居る事をも知らずに。不幸にも母親を一眼も見た事のない小さな王女マリナは、クレオンの手で尊い身分に恥ぢない様に育てられた。クレオンは非常の注意を拂つて教育されたので、マリナが十四の年にはもう當時の最も深い學問をした人でも、マリナに及ばない。

言ふ程學問が出来る様になつた。又彼女は不死の人の様に美しく歌ひ、女神の様に踊り、針を持つても鳥や果物や花や、木當の形と少しも異はぬ程、巧であつた。自然の薔薇もマリナの絹の薔薇と少しも違はぬ程であつた。然しマリナが教育を受けたお影で皆を驚かす様な手腕を得たが、クレオンの妻ディオニシアは、自分の娘が愚鈍なため、マリナ程に少しも上達しないので、嫉妬を起して深く深くマリナを憎む様になつた。そして自分の世の凡ての賞讃がマリナの上に集り、マリナも同年で同じ様に教育を受けながら、同じ様に上達しなかつた自分の娘がマリナに比して無視されてゐるのを見て、マリナさへ居なくなれば、自分の不作法な娘もつゝ尊敬される様になるだらうとさもしい心を起し、マリナを追ひ出してしまはふと言ふ計畫を立てた。此の謀に従つてマリナを殺す爲に男を雇つた。丁度この時惡計の爲めには好都合に、忠實な乳母のリコリイダが死んだ。若いマリナがリコリイダの死を嘆いてゐた時、ディオニシアは暗殺をさせる様に命じた男と打合せをしてゐた。此の悪行をする爲に雇つたレオナインは、非常な悪漢ではあつたけれども、さう説き付けてもそれを引受けようとはせなかつた。マリナはそれ程凡ての人々の心から愛されてゐた。

「あの娘御は全く立派な人ですよ。」

「だからさ、それ丈早く天國へやれば佳いんぢやないか。」と無慈悲な敵が答へた。

「それ、向ふから死んだ乳母のリコリイダの爲に泣きながらやつて来る、どうだね私の言ひ付けに従ふ決心はないかえ？」

「よろしい、決心しました。」

レオナインは抗ふのも怖ろしいので斯う答へた。斯くしてその一つの短い言葉で比類ないマリナは不時に殺される様な運命となつた。娘は毎日ノリコリイダの墓に撒くのだと言つてゐる花籠を手持つて段々と近寄つて来た。夏の日の續く間は紫のすみれや金盞花が絨壇のやうに乳母の墓邊にはかゝつてゐただらう。娘は言つた。

「あゝ、私の身の上、哀れな不運な乙女、嵐の中に生れ、その瞬間に母を失ひ、まるで此の世は私の親しい者を見て取去つて行く不斷の大嵐の様に思はれる。」

「どうしたの、マリナさん。」と何食はぬ顔してディオニシアが言つた。

「たつた一人で泣いてゐるの。どうして私の娘と一緒にゐないの。リコリイダの爲に泣くのはおよしなさい。私が新らしい乳母になつてあげますから。そんなに無暗に泣くさあなたの美しくさが無くなりますよ。さあ、あなたの花をお貸しなさい。潮風に當ると悪くなりますからね。レオナインと一緒に散歩でもしてらつしやい。空気がきれいだから元氣が付くでせう。さあ、レオナイン、

お嬢さんの腕をとつて散歩しておいで。」

「いゝわ、小母さま、あなたの召使をお使ひしてはすみませんわ。」

レオナインはディオニシアの召使の一人だったのである。然しディオニシアは娘を唯一人でレオナインの側に残して置かうと色々たくらんで、

「さあ、さあ、私は、あなたのお父さんである王子様を愛してゐるし、あなたをも亦愛してゐるのですよ。だから毎日くお父さまがお出になればいゝがと待つてゐるのです。だから若しお出になつた時に私等が絶世の美人だと言ひ送つてゐたのに、あなたが嘆きの爲にやつれておいでだと、お父様は私等が關ひつけなかつたのかと思召すかも知れませんがね。お願いですから散歩してらつしやい。前の様に元氣になつて頂戴。老人も青年も心を奪はれる、その立派な顔を大切になさいよ。」

「では行きませう。然しちつとも行き度くはないんですけれど。」

マリナは執拗く言はれて終に承知した。ディオニシアは歩き去る時レオナインに「私の言つた事をお忘れでないよ。」と注意した。怖ろしい言葉だ、マリナを殺す事を忘れると言ふ意味なんだからもの。

マリナは自分の生れ故郷である海の方に向つて言つた。

「風は西の方へ吹いてるの?」

「西南です。」

「私が生れた時は北風だつた。」

それから嵐や、暴風、父の悲しみ、母の死等が娘の頭に湧き起つた。

「リコリイダの話に依るに、私の父は少しも怖れなかつた相だつた。そして水夫達に『船員達よ元氣を出せ。』と叫んでゐたのです。手には荒縄のために疵をし、帆檣を握りながら甲板を割かうと狂ふ海と闘ひつゝ。」

「それは何時の事です。」

「私が生れた時だよ。風や浪の激しかつた事は今迄にはこてもなかつた相だよ。」

それから嵐の有様、水夫の活動、水夫長の口笛、船長の叫聲等を物語つた。

「その爲に船の混亂は三倍になつた。」

リコリイダはいつもくマリナの不幸な誕生の話を語り聞かせてゐたので、マリナの想像には此等の有様が生々と浮んで来るのだつた。然し此の時レオナインは娘の話を遮つて祈りを捧げよと言つた。



「何故なんです。」

ミ譯が判らないので怖くなり出してマリナが尋ねた。

「若し祈を捧げるのなら少しの間は許して上げよう。が、ぐずぐずしてゐてはいけない。神様は耳敏いから。私は急いで仕事をやるミ誓つたんだ。」

「あゝお前私を殺すの？まあ、どうして。」

「奥様のお言ひ付けでさ。」

「さうして私を殺させるのだらう。さう考へて見ても私はあの方に害を加へた覚えは無い。悪る口も言はなかりや、どんな生物にだつて害になる様な事はしない筈だつたのに。信じて下さい鼠一匹だつて蠅一匹だつて殺した覚えはないのに。私は一度蟲を踏んだ事があるけれど、私はその爲にはさんざん涙を流してあやまつた。何が悪かつたのだらう。」

「私の任務はそんな理由を言ふのではなくつて、唯實行するだけなんです。」

男が斯く言つて今や殺さうとした時、丁度一隊の海賊が上陸して、マリナを見て、分捕品として船に連れ歸つた。

マリナを分捕品とした海賊達はミテイレンまでつれて行つて、奴隸に賣つた。其處で、哀れな状

態ではあつたが、間もなくマリナはその美しくささその徳とに依つてミテイレンの町中に知れ渡つた。そしてマリナを買つた人は娘で儲ける金に依つて金持になつた。マリナは音楽や、舞踏、縫取り等を教へ、それで得た金は凡て主人や主婦に與へてゐた。そして遂に娘の博學多藝である言ふ名聲がミテイレンの知事である若い貴族リシマカスの耳に這入つた。そしてリシマカスは自分でマリナの住んでゐる家へ行つて、全市民があんなに賞讃してゐる絶世の美人を見ようと思つた。娘の話が又大變リシマカスの氣に入つた。色々この娘の立派なと言ふ評判は聞いてゐたが、このマリナがあれ程、敏感で、淑徳あり、善良であらうとは思つてゐなかつた。そして彼はマリナにかう言つて別れた。勤勉と婦徳とを守るやうに、そして、自分から次に便りをすればきつミマリナのためになる事だと。ルシマカスはマリナの容貌風才が美しい優美であると同じ様に、驚く程美しい感情を持ち、立派な育ちであり、優れた性質を持つてゐるので、結婚したいと願ひ、又娘は今はいましい身分ではあるけれ共、尊い生れである事を知りたいミ願つた。然しそれを尋ねるミ娘は座つたまゝ泣くばかりであつた。

扱一方にタルサスでは、レオナインはディオニシアの怒りを怖れ、マリナを殺したと報告した。

極悪非道なディオニシアはマリナは死んだと言ひふらして、出鱈目の葬式をして立派な石碑を建て

た。その後間も無くペリクレスは忠義な大臣ヘリカヌスを従へ、娘を自國へつれて歸らうと思つて王女に逢ひにタイルからタルサスへ遣つて來た。王子は娘が未だ嬰兒である時分に、クレオンとその妻に托して去つた時以來娘を見た事が無かつたので、此の善良な王子は亡き王妃の忘れ形見と面會する事を想像してどんなに喜んだであらう。然し王子がマリナは死んだと言ふ事を聞かされ、その爲に建てた言ふ石碑を示された時、此の不幸な父の受けた悲しみは非常なものであつた。そして自分の最後の望であり、自分の愛するテイサの唯一の思出（マリア）が埋られた國を見てゐるに堪へないで、船に乗り急いでタルサスを去つた。船に乗るや王子は懶い、重苦しい隠微に捕へられて、一言も物も言はず、兄の周圍の物事には全く無關心であつた。

タルサスからタイルへ航海中にその航路に當つてゐるマリナの住んでゐたミテイレンを通過した。その都國の知事、リシマカスは海岸から此の高貴な船を見て、誰が乗つてゐるのかを知り度く、その好奇心を満足させるために船はしに乗つて船側へ漕ぎよせた。ヘリカヌスは丁重に知事を迎へて此船はタイルから來たものであり、その王子ペリクレスを送りつゝあるのだと告げた。

「その王子は、此の三ヶ月言ふもの誰にも言葉を交はさず、食物さへ取らず、唯嘆き悲しんでゐられるのです。その原因を盡くお話すればきりがありませんが、その重なる理由は愛せられた王女

ミ王妃をお亡くしになつた事なのです。」

リシマカスはその悩んでゐる王子を見たいと願ひ、王子を見ては嘗ては立派な人であつたらうと思ひながら言つた。

「陛下、王様、萬歳、神様の御護りがあります様に、陛下、」

然しリシマカスが物を言つても無駄であつた。ペリクレスは答へなかつたのみならず、見知らぬ人が近寄つて來るのをも見ようこさへしなかつた。そこでリシマカスはある比類ない娘マリナの事を想ひ出して、あの娘の美はしい言葉なら此の黙つてゐる王から答を引出す事が出来るだらうと考へた。そこでヘリカヌスの許を得てマリナを呼びにやつた。マリナが自分の父が悲しみの爲に身動きもせず座つてゐる船にやつて來た時、船員達はあだかも娘が自分達の王女であると言ふ事を知つてゐるかの様に歓迎して叫んだ。

「仲々立派な婦人だ。」

リシマカスは斯んな稱讚を聞いて喜んだ。

「あの娘は仲々立派な者です。若し高貴の生れだと解りさへすれば、私はもうあれ以上の娘を撰ぶ必要はありません。私の妻として非常に幸福だと思つてゐるのです。」

そして知事は賤しく見える娘が嘗ては高貴の婦人であつたかの様に丁重な言葉で話し掛け、可愛  
い美しいマリナを呼びながら、此の船中に偉い王様が悲しみと嘆きの爲に黙つてしまつて居られ  
ると語り、まるでマリナが健康な幸福を授ける力を持つてゐるかの様に、此の見知らぬ王の隠憂を  
癒して呉れと願つた。

「はい、私は出来るだけの力を盡して癒して見ませう。私と私の女中との外は誰も王の側へは近  
かないならば。」

ミティレンでは王家の生れでありながら今は奴隸になつてゐると語るのを耻ぢて、あれまで注意  
深く自分の生れを秘してゐたマリナは、先づ最初ペリクレスに自分自身の運命の轉々たる變化を語  
らうと思つて、自分が如何に高い地位から落ぶれたかを話し出した。あだかもマリナは自分が父の  
前に立つてゐる事を知つてゐるかの様に、語る言葉は盡く腸を斷つ思ひであつた。然し娘がこんな  
事を語つた理由は、不幸な人の注意を惹くにはその人と同じ様な或る不幸を物語るに如くはないと  
考へたからである。美しい聲の響がめつてゐた王の心呼び覺した。王は長い間凝視し、不動  
の状態であつた眼を上げた。母にそつくりそのまゝであるマリナは、驚いた王の眼には亡き王妃の  
姿として見えた。長い間沈黙を守つてゐた王は遂に口を切つた。

「予の最愛の妻は此の娘によく似てゐた。そして娘はさぞやこの通りであつただらう。王妃の様  
な角額、脊も一寸とは異はず、竿の様に眞直で、銀色の聲で、眼は寶石の様だつた。一體お前はど  
こに住むのか。娘よ、御前の家系をお言ひ。お前は段々落ぶれさゝれたので、明ら様に語り合へ  
ば、予の歎きと同じ程に不幸なのだと言つたぢやないか。」

「え、その様な事を申し上げました。然し私の考へが正しいと保證するだけを申し上げたに過ぎ  
ません。」

「お前の身の上を話して呉れ。若しお前が予の耐へた苦しみの千分の一をも知つたなら、お前は  
男の様にお前の悲しみを忍んだのだし、予は少女の様にしか苦しまなかつた事になるのだ。それに  
お前はまるで忍耐の権化かの様に墓になつてしまつた王をながめてゐる。それにも拘らず嬉しさう  
に笑つてゐる。親切な娘よ、どうしてお前は名前を失くしたのか、お前の身の上をお話しよ、お願  
ひだ、さあ私の側に座つて。」

彼女が自分の名がマリナであると語つた時の王の愕きは如何ばかりであつたらう。と言ふのはこ  
んな名前は普通には無いので、自分が特に自分の子供に「海で生れた」と言ふ意味を表すために發  
明したものだつたから。

「お、お前は予を嘲弄するのだな、何かの神の所から遣されて來、て予を世の嘲弄物にさせようとするのだな。」

「御待ちなされませ、陛下。でなけやお話を止ませう。」

「よしよし、辛抱して聞かう。お前が自分をマリナミ呼んだので予がどれ程愕いたかは、お前には少しも知らないのだ。」

「私の名前は少しは権力のある私の父、或國の王様に付けて貰つたのです。」

「え、王様の娘なのか！そしてマリナミ言ふのか！お前は立派に身體が具つてるのだらうね？妖精ぢやないだらう？さあお話し、何處で生れたのだ、何故マリナミ言ふのだ。」

「私がマリアと呼ばれるのは海で生れたからなのです。私の母はやはり或る王様の娘でした。母は私が生れた瞬間に死にました。私の好きな乳母のリコリイダがいつもさう泣きながら話してくれました。王様である私の父は私をタルサスに残して置きました。所がクレオンの妻が遂に私を殺さうとしたのです。所へ海賊の一隊が來て私を救つて呉れました、そして私をこのミテイレンにつれて來たのです。王様、まあ、何うしてそんなにお泣になるのです。陛下には私が詐欺師だと思はれるかも知れませんが、然し本當に私は、若しベリクレス善王が生きてゐるのなら、その王ベリクレスの娘なのです。」

そこでベリクレスは自分の不意の喜びに仰天して、又そんな事が本當だらうか疑ひながら、大聲に侍臣を呼んだ。侍臣達は愛する王の聲が聞えたので大に喜んだ。そして王はヘリカヌスに言つた。

「お、ヘリカヌス。予を打て、傷づけろ、予を直ぐに苦しめて呉れ。さうでないと大海の様な喜びが予に迫つて來て、その爲に予は命を奪はれさうだ。海で生れた娘、こちらへお出で、タルサスに埋められ、又海で見付かつたのだ。お、ヘリカヌス、蹲いて聖い神に感謝を捧げるんだ。此れこそ予のマリナだ。さあこの娘の上に祝福がある様に！さあヘリカヌス、新らしい衣服を持つてお出で、娘はタルサスで死んだのぢや無いんだ。蠻女ディオニシアが殺さうとしたけれども、お前が蹲いて王女様と呼んだなら娘は何も彼も話すだらう。これは誰だい？」（リシマカスに始めて氣がついた。）

「陛下、ミテイレンの知事です、陛下の御不快を聞いて謁見に來られたのです。」

「予は抱擁をしませう。予の衣服を持つてお出で、様子を整へねばならぬ。——お、天よ私の雄をお恵み下さい。おや、然しあの音楽は何だ——親切な神が奏で、呉れるのか、それとも自分の

喜悅の餘り空想に欺かれたのか、靜かな音樂が王の耳に聞えて來たのである。

「陛下、私には何も聞えませぬ。」ミヘリカヌスが答へた。

「聞えない？ あれは天體の音樂だ。」

リシマカスは何の音樂も聞えないものだから、不意の喜びの爲に王の理性が狂つたのだと推測して言つた。

「反對するのは悪いから、せられるまゝに放つて置かう。」

そして自分達にも音樂が聞えると言つた。王は非常に眠くなつて來たことほしたので、リシマカスはカウチ(長椅子)の上に横つて少し休まれ様にと奨めた。王は頭を枕につけるや全く過度の喜びのために深い眠りに落ちた。マリナは黙つて父の眠つてゐる側に座つて見守つてゐた。

王は眠つてゐる間に夢を見てその爲にエフェサスへ行かうと決心した。その夢と言ふのは、エフェサスの女神であるダイアナが王に現れて、エフェサスの自分の寺院へ來て、其處の聖壇の前で王の生涯その不幸とを話す様に命じ、その女神が自分の銀の弓に掛けて誓つて言ふには、若し自分の命令通りに従ふならば王は亦無幸福に出逢ふだらうと言つたのである。そして王は不思議にも快い氣分になつて起き出で、この夢を物語り、その女神の命令に従はうと言ふ自分の決心をも語つた。

つた。

その時、リシマカスはベリクレスに、ミテイレンで出来るだけの待遇を致しますから、元氣を付けるために上陸なさる様にさすめたので、その深切な申出を喜んで受け、一日二日は滞在しようとして承諾した。その間に如何な御馳走が出、何んな娛樂が出来、何んな立派な芝居や宴會がミテイレンの知事に依つて、彼がまだ賤しい地位にゐる時分から尊敬してゐたマリナの父である王を迎へる爲に盛大に催されたかは想像に餘りあらう。そして又ベリクレスはリシマカスが、自分の娘がまだ賤しい身分だつた時分から非常に娘を尊敬してゐた事を知り、又マリナもそれを嫌には思つてゐなかつたのでリシマカスの結婚の申込に對して少しも不服を唱へなかつた。唯それを承諾する前に條件をつけて、一緒にエフェサスのダイアナ寺院を訪ふ様にと言つた。そして間もなく三人は共にその寺院へと船出した。そしてダイアナ自身が豊かな風を帆にはらませたので、數週間の後には無事にエフェサスに着く事が出來た。

その寺院に家來共を従へてベリクレスが這入つて行つた時、女神の聖壇の側にはベリクレスの妻テイサを生き返らせた善人セリモン(今は老人になつて)立つてゐた。テイサは今ももう尼になつて聖壇の前に立つてゐた。ベリクレスは妻を失つた事を長い間歎き悲しんだ爲その様子が大分衰へ

てはるたが、彼女も夫れが自分の夫の顔である事を知つてゐた。そして王が聖壇の前に進んで話を始めた時、その聲を想ひ出した。そしてその言葉を愕ろき嬉しさに満ちて聞いてゐた。ペリクレスは聖壇の前で次の様に語り出した。

「南無！ ダイアナ様、あなたの命に従ひまして、こゝに告白を致します。私はタイルの王で、國を出ましてからペンタボリスで美しいテイサミ結婚を致しました。が妻は海上でマリナミ言ふ娘を産むにすぐに死んでしまひました。娘はタルサスでディオニシアに育てられました。十四の時殺され様としたのですが、幸運にもミテイレンにつれ去られました。丁度その都國の沖を通つてゐました時、幸運にもこの娘が偶然にも船へ来る事になり、色々の事をよく憶えて居りましたため私の娘だと言ふ事が判つた次第で御座ります。」

テイサは王の言葉に依つて自分の心が様々に變轉して行くその苦しさに耐へ兼ねて、

「おゝ、あなたは、あなたは、ペリクレス王です。」  
と叫んで氣絶した。

「此の女は何を言つたのです、死にさうです。皆おい、助けて。」

「陛下、若しあなたがダイアナの聖壇でお話しになつた事が本當ならば、この方はあなたの妻で

す。」

とセリモンが言つた。

「御老人、そんな事はありません。私は自分のこの手で彼女を海へ投込んだのです。」

セリモンは其處で、嵐の朝早く此の婦人がエフェサスの岸に打擧げられてゐた事から、棺を開けると中から高價な寶石や紙が現れた事、幸にも生き返つた事、又此のダイアナの寺院に入る様になつた事等を物語つた。そしてやつと氣絶からよみがへつたテイサは言つた。

「おゝ、殿さま、あなたはペリクレスでは御座いませんか。聲と言ひ様子と言ひそのまゝです。あなたは嵐の事、お産の事、死の事をお語りになつたではありませんか。」

「死んだテイサの聲だ。」

「私はそのテイサなのです。死んだと思はれ、溺れたと思はれた。」

「おゝ有難い、ダイアナ様。」

信心の心から驚愕してペリクレスは叫んだ。

「段々良く判つて來ました。あなたの御手のその指輪は、我々が涙ながらにペンタボリスを去ります時、私の父王があなたに差上げたものですね。」

「お、さうだ。神様、あなたの與へられた今の喜びに比べれば今迄の不幸はまるで遊戯みた様なものです。さあ、テイサ、またこの腕にお前を抱いて上げよう。」

「私の心はお母さんの胸に抱かれよう。踏り上がつて行きます。」

とマリナが言ふ。ペリクレスは王女をその母に紹介した。

「御覽！ こゝに蹲いてゐるのが、お前の肉の肉だ。航海中のお前の重荷だ。海上で生れたからマリナといふ名だ。」

「まあ嬉しい、私の子供！」

さう言つて母が有頂點になつて喜んで娘に抱きついてゐる間にペリクレスは聖壇の前に蹲いて言つてゐた。

「尊いダイアナ様。夢をお告げ下さいました事を御禮申上げます。此の御禮として私は毎晩お供物をお供へ致します。」

そして其場ですぐに、ペリクレスはテイサの許しを得て、淑徳のマリナを、それに恥しくないリシマカスとの結婚の約束を與へた。

斯くしてペリクレスと、王妃と、王女との三人は災難のためにその徳を試された一つの立派な模

範となつた。(天はそれに依つて人々に忍耐と不撓とを教へたのである。)そして終に同じ天の導きの下に成功して、機會や變化と言ふものを征伏してしまつた。ヘリカヌスにも亦眞實と誠實と、忠義との尊い模範を見る。彼は王位に即けられようとした時にも、他人の不幸に依つて成功するよりもむしろ正しい即位者を呼び返したのであつた。テイサを生き返らせたセリモンも、亦我々に智識に依つて導かれた善言言ふものが、人類の上に利益を與へ、人を神の性質にまで近づけるものであると言ふ事を教へて呉れた。唯一つ最後に残つてゐる話は、クレオンのよこしまな妻ディオニシアが、その邪心に相當する様な最後を遂げたと言ふ事である。タルサスの住民達は、マリナに對する残酷な仕打ちを知ると、自分達の命の親である恩人の娘の爲に復讐しようとして、クレオンの宮殿に火を放つて、クレオンも妻も、家屋凡ても焼き盡してしまつた。そして又神もその様な邪曲な殺人者が、たとへ考へた丈で實際には行はなかつたとは言へ、か様に罰せられたのを見て、その罪に相應だと嘉し給ふたであらう。

大正十三年六月十五日印刷  
大正十三年六月十八日初版發行  
大正十三年六月二十日再版發行  
大正十三年六月二十五日三版發行

セキスピア劇二十篇  
定價金貳圓四拾錢

著者

櫻見清  
同エツサ

發行者兼  
印刷所

東京市神田區表神保町三番地  
吉川與四次

印刷所

京都市下京區下寺町五條下ル  
閣文閣印刷所

不許  
複製

發行所

東京市神田區表神保町三番地

東京閣文閣出版所

振替口座東京六〇〇六一



廣島高等師範學校教授 小日向定次郎著

# 英文學史

菊版六百頁

茶布表紙

定價五圓五拾錢

送料貳拾七錢

## 黎明期よりミルトン時代まで

— 参考書目及索引附 —

内容大要 アンゲロサクソン時代—ケルト民族の文學・アンゲロサクソン民族の文學・アンゲロサクソン時代の物語類及傳説一瞥・ノーマン文學の英文學に及ぼせる影響及史書宗教書の出現・チヨ  
ーサ時代—英國詩壇の曉星チヨーサ・民衆詩人の出現と十四世紀英國の狀態・過渡期時代—文藝復興より印刷術發見へ・スコトランド詩壇の一瞥・民謡の流行と諷刺詩・戯曲の起原と發達の徑路・シ  
エイクスピア時代—イザバス朝に於ける文藝復興の諸因・寓意詩の起楚—エドマンドスヘンサ・イ  
リザバス時代の散文家・ミルトン時代—沙翁以後の劇壇及詩壇・宗教派詩人の一群・ヒューリタン  
派詩人の一群・ミルトン時代の散文家宗教的作家の一團

522  
291

終